

Hayakawa Hiroshi

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を名誌・紙に発表。著書に「介護人財創造塾」(尚書房)、「介護保険改訂に勝つ!経営」(年友企画)、「データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望」(日本医療企画)、「介護事業の羅針盤」(シルバー新報社)など。  
http://www.hayakawa-planning.com  
ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

介護マネジメント塾

## 経営(継業)のツボ

じょうをしるをめいという

## 知常曰明

転期に立つ経営者の資質の考え方®

早川浩士

(有)ハヤカワプランニング代表取締役

# 6

### 「常を知れば容」

中国古典「老子(第16)」には、「常を記した一文がある。

「命に復るを常といい、常を知るを明といい、常を知らざれば妄作して凶なり、常を知れば容なり」

「常」とは、いつでも変わらないこと。それは、昔も今も、同じように変わることのない不変の力で働いているものことであり、生まれた命が復るということも「常」という自然界の常法(一定の規則)の一つなのだ。

たとえば、生まれたばかりの赤ん坊の呼吸は、昔も今も、これから先に生まれようと変わらない。呼吸は、命の育みに欠かせない「常」の力が宿っている。

「永息(呼吸の仕方)は長生きに通じる」との例えもあるが、長生きの人の永息と自らのそれ、つまり「常」の違いを気にとめる人は稀だ。

しかし、「わたし(の考え)と、あなた(の考え)は違う。だから、あなたは間違っている!」と目くじらを立てて指摘と批判に明け暮れる人もいるが、「凶(不吉で不幸)を招くだけ。誰にもそれぞれ名前や性格があるのと同じように、人は人の数だけ違っている。」

ところが、「少し(外見、考え方など)

違っているにすぎないことを「常」ではない」と許し入れること(許容)を拒む。

「常」には、次の意味がある\*1。

- 一 入れること、盛ること、その中身のこと
  - 二 収容、内容、容器など。
  - 三 受け入れること、許すこと、容赦、容認、寛容など。
  - 四 ゆとりのあるさまのこと、従容のこと。
  - 五 たやすいこと、容易のこと。
- 「常」を知れば「容」となれるのだが…

これが、大筋の解釈である。

### 常常の姿勢が問われる

音読みの「常」は、次の意味がある\*1。

- 一 つね、いつも、ふだんのこと、常食、常備、日常など。
- 二 一般と代わりがないこと、並、普通のこと、常識、通常など。
- 三 いつまでも変わらぬこと、常緑など。
- 四 不変の道德のこと、五常と使う儒教の考え方。人の常を守るべき五つの道德(仁・義・礼・智・信)のこと。父は義母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝(中国古典「書経」)。父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信(中国古典「孝子」)などがある\*2。

訓読みの「常」は、こうだ\*1。

- 一 かわらない(永久不変である)ことで、常になど。
- 二 ふだん・平素と変わらないことで、常日頃など。
- 三 並、普通、あたりまえのこと、世の常の人など。
- 四 ならない、ならわしのこと、人情の常としてなど。

介護サービスを利用するには、介護や日常生活上の支援が必要な状態であると認定を受けることが前提である。

「常」を繰り返せば、

「常常」考えていたこと」

「常常」の心がけ」

「常常」の心構え」など、普段、いつもそう感じているという意識を強調した使い方となる。

国、保険者、事業者、利用者、そして被保険者も「常常」の姿勢が問われる介護保険は、4月に10年目を迎える。

座るにも寝るにもなど、いつでもとか、ふだんという意の常住坐臥、平生から常に継続しているという意の常住、不断の常住は、いつもとか、常に住んでいることを指す言葉である。

「常」を知るのか、「常」を知らずと済ますのか。「常(住)」に対しての「常常」のあり方を問わねばなるまい。

\*1 「広辞苑」より

\*2 2007年11月号本欄参照